

平成 26 年 12 月 24 日

今回、平成 25 年度に「東日本大震災にかかる災害復旧資金」をご利用いただいた事業についてご紹介いたします。

医療法人社団ときわ会 介護老人保健施設 仮設櫛葉ときわ苑

1. 施設の概要

所在地：福島県いわき市内郷高坂町四方木田 1 5 5

入所定員：100 名

施設HP：<http://www.tokiwa.or.jp/welfare/naraha/summary.html>

2. 復旧への取り組み

(1) 被災直後の施設の状況について

平成 23 年 3 月 12 日に原発事故が発生し、福島第一原子力発電所から半径 20 キロ以内に施設があったことから櫛葉町の避難指示に従い入所者 88 名、職員 37 名が 1 次避難先としていわき市中央台南小学校に集団避難し 1 週間を過ごしていました。



しかし、日に日に入所者の健康被害が発生し、医師の診療が必要な入所者や入院に至る入所者が発生したことや避難生活が長期化すると判断したことから、入所者の様態悪化を防ぐため、県及び町と直接交渉して入所者 71 名、職員 11 名がひらた中央病院に 2 次避難先として移動し、避難生活を送ることになりました。

しかし、病院に長期間避難するわけにもいかなかったため、法人グループの別施設である小名浜ときわ苑の応急的な復旧作業に努め、2 次避難から約 1 カ月後の 4 月 18 日に、小名浜ときわ苑を事業再開するとともに、旧櫛葉ときわ苑の入所者 53 名を小名浜ときわ苑で引き受けたとのことでした。

しかしながら、小名浜ときわ苑は入所定員が 150 名の施設であるため、旧櫛葉ときわ苑の入所者を受け入れた際は 200 名近くが入居することになり、入所者も職員も不便を強いられた状況だったそうです。

施設としての機能を最低限度の療養環境や介護サービスの質を維持することに努めたものの、施設入所者及び職員はストレスが蓄積され疲弊していくことが著しかったため、仮設老健が竣工するまでは言葉にならないくらい非常に苦しい思いをしたとのことでした。

(2) 機構の災害復旧資金について

災害時における当座の運転資金等はメインバンクである七十七銀行から調達できたので日々の運営資金確保には比較的不便はなかったものの、小名浜ときわ苑におけるオーバーベッドでの施設運営には限界があり、新たに施設を整備するにしても土地の取得及び施設建設の計画を実施できるだけの余力は当時の法人にはなかったため、療養環境の改善をどのように行うべきかが最重要課題だったそうです。

そのような中で、老健施設の再建について国の補助金が対象になったことや平成 23 年 4 月に機構の東日本大震災にかかる災害復旧資金が制度化されたことを知り、檜葉ときわ苑の再建に向けた取り組みを本格化させたとのことでした。

国の補助金は医療法人の場合自己負担割合が総事業費の 1 / 2 (借入金可) となっていたことから、総事業費の 5 割を超える事業費について機構融資で調達することを計画したそうです。

しかし、被災にあった旧檜葉ときわ苑の建築資金についても機構から借り入れており、しかも、旧檜葉ときわ苑を平成 22 年 8 月に開設して間もなく被災したため既往の借入金の元金償還が始まっておらず、新たに施設建設費を借り入れることは二重に債務を負うことになるため機構からの資金調達が可能かどうか不安な部分があったそうです。

幸い機構が被災に遭った既往の貸付先に対し超長期の償還緩和を実施する態勢を整えたことから、今回の施設再建の事業計画もスムーズに行えたため非常に有難く感じているとのことでした。

(3) 入所者確保・スタッフ確保について

仮設檜葉ときわ苑の入所者のほとんどが双葉郡の出身者となっています。現在、入所待機者が 80 名いるがその方々も双葉郡出身の方となっています。いわき市に仮設老健を建設したものの、双葉郡出身者を受け入れる施設として認知されています。いわき市には約 2 万 5 千人の双葉郡住民が移住していることもあり入所者の確保は心配ないのですが、双葉郡出身者の入所したいという要望に応えられないことが非常に心苦しく感じているとのことでした。

スタッフ確保は、檜葉町だけでなく双葉郡全体が避難するという状況であったため、いわき市へ避難したスタッフも少なくなかったことや、檜葉町の自宅に待機させていたスタッフでいわき市で就業が可能な者については呼び寄せて継続雇用できたそうです。不足する従事者はハローワークの利用及び口コミ等で募集したところ、応募者が思いのほか多かったのがスムーズに確保できたとのことでした。

(4) 震災後の教訓と今後の課題

震災直後は食糧・水・電気などのライフライン確保に非常に苦勞したことから、3 日分の非常食と水を常備することになったそうです。また、電気を確保するために厨房に

小型発電機を設置しました。厨房に設置したのは、災害時は療養室等のスペースは最低限の明かりがあればよく、厨房で電気を使うことが多かったので厨房に設置することにしたそうです。

また、通路は災害時にストレッチャーがすれ違うことが可能となるスペースを確保し、迅速な避難ができるよう工夫したことや故郷に帰れない入所者に少しでも快適な療養スペースを提供したいとの思いがあり、療養室を通常より広めにしたそうです。



今後の課題として、スタッフの確保が挙げられました。理由には、現状スタッフの確保に特に問題はないものの、最近訪問介護などの通所施設が近隣に増加しているため、深夜勤を行いたくないスタッフが通所系施設に転職するケースが出始めているからだそうです。

そのため、今後は介護職員が不足している他の施設に転職するケースも予想されるので、長く勤務してくれるよう、法人として職員の養成に尽力したいと述べていました。

(5) 将来に向けて

いわき市には双葉郡の住民約2万5千人が仮設住宅・借り上げ住宅等に居住しています。そのため入所相談も増えてきています。いわき市と双葉郡では方言も違うため、自分の言葉で日常生活することができる仮設櫛葉ときわ苑に入所したいという希望者が多いそうです。

仮設櫛葉ときわ苑は、いわき市に在していても双葉郡の施設であり、いわき市に避難している双葉郡の住民の役に立たなければならないという気持ちが強いことから、仮設櫛葉ときわ苑は、入所者に対して「いわき市に居ても故郷にいるような感覚」を与えるように努めなければならないと考えています。

今回、医療法人ときわ会が双葉郡のためにできる最善なこととして、職員の協力を得ながら仮設老健施設の開設を実現することができました。施設開設に至るまでには様々

な苦勞もあったのですが、あきらめず信念を持ち続けていると、その思いが現実化していくことを知り、この経験が医療法人ときわ会にとって大きな財産となったそうです。

以上